

『ソウル ミーツ ボディ』

梅津正史

加納栄太郎

古賀明日香

北園きらら

戸田かおる

田代菜々子

熊取佳子

門衛

クラブの DJ

バーカウンター係の人

長崎市民

1

路面電車の中。

梅津と加納。

加納「あそこ、昔、市場なかったっけ。大橋市場」

梅津「このへんは、おれ、わかんないよ」

加納「あ、あの消防署、覚えあるよ」

大学前の電停で、二人、降りる。大学の正門まで歩く。

門衛の前で、二人、立ち止まる。

梅津「うん？」

加納「おれ、ここで、待ってる」

梅津「なんで」

加納「おまえ、一人で行けよ」

梅津「なんで」

加納「そんな、がっついて会いに行くような感じじゃだめなんだよ」

梅津「どういうことだ」

加納「おまえ、おれのこと田代になんて言ったんだ」

梅津「え、中学の同級生」

加納「そうか……。いまの、おれだよ。いま、おれは、なんなんだ」

梅津「は。どういう意味だよ」

加納「あいつらになんて説明するんだ」

梅津「同級生が久しぶりに酒飲むのに説明なんかいらないだろ」

加納「おまえ、大学生を甘く見るなよ」

梅津「正月じゃないか、心配するなって」

加納「10日過ぎても正月って言うのはおまえくらいだぞ」

梅津「1月いっぱい正月だろ」

加納「そんなことはないだろ。そんなことを言っていると、あいつらに、おれたちはいつまでも正月気分の呑気なやつらだって思われるぞ」

梅津「なんだよ、急に」

加納「おれのことを政治家だと言ってくれ」

梅津「政治家？ははは。おまえ、笑われるぞ」

加納「じゃ、政治家を目指しているって」

梅津「そんなの目指してるのか」

加納「おれ、いま。東京の、日本再生国民会議ってところで、勉強会とかに参加させてもらってるんだ」

梅津「へー」

加納「日本再生国民会議。知ってるだろ」

梅津「いや」

加納「大学って、大学生じゃなくっても、入れるのか」

梅津「え、だって、大丈夫だろ」

加納「田代は、なんて言ったんだ」

梅津「ひとまず、大学に来たらって」

加納「そうか。なるほどな」

加納「早く、行ってこいよ」

2

学生会館のスタジオ。

演劇部員たちによる、別役実「マッチ売りの少女」のリハーサル。

戸田、椅子にすわり、ゆっくりと眠りに落ちる。

田代、北園、熊取、演技を始める。古賀、すわって見ている。

田代「どうしたのかしら、あなた。どうしたの、この、あなたのお姉さん？」

北園「眠っているよ」

熊取「眠っているのです。お姉様は時々眠るのです。そして、時々目をさまします」

田代「まあ、涙を流しているのかしら、ほら、あなた」

熊取「泣いているのです。お姉様は眠りながら泣くのです。お姉様はとてもふしあわせなのです」

北園「あなた、この人を起こして出て行って下さい。ね、私はね、意地悪でこんなことを云うんじゃない。あなた方がもし、変な小細工をせずに黙って入ってきたのなら、大歓迎だ。本当ですよ。しかしね、いいですか、あなた、聞いてるんですか？」

熊取「ええ」

北園「出て行って下さい」

熊取「でも、お姉様はとてもつかれているのです」

北園「あなた、この人の本当の弟さん？」

熊取「そうです、本当の……」

田代「いつごろ、そう思いました」

熊取「何をです」

田代「いつごろから、この人があなたのお姉様だということに気がつきましたの？」

熊取「そうかなり前です。かなり……」

田代「はっきり思い出して下さいよ。それがとても重要なんです」

熊取「でも、気がついた時には、もう、この人は僕のお姉様でした……」

北園「気がついた時にはもう……？じゃ、話しにならない」

田代「その前に何かあった筈だわ」

熊取「いろいろありました。いろいろあってそして、フト気がついたら、……お姉様」

北園「まるで、奇跡だ……」

北園「妻が、その前に何かあった筈だわって、言ってるでしょ。これ、なにがあったの。いや、具体的な事実を知りたいわけじゃなくって、なんで、こんなこと聞くの、この人、このタイミングでってこと」

北園「だって、弟だったら、そういうもんでしょ、お姉さんがお姉さんだって気がつくのは、実際いつの間にかでしょ。弟の言い分としてはなんにも間違っていないじゃない」

北園「なにかあった筈ってどういうこと？」

古賀「続けてください」

熊取「でも、気がついた時には、もう、この人は僕のお姉様でした……」

北園「気がついた時にはもう……？じゃ、話しにならない」

田代「その前に何かあった筈だわ」

熊取「いろいろありました。いろいろあってそして、フトきがついたら、……お姉様」

北園「まるで、奇跡だ……」

熊取、ビスケットをひとつとり、食べる。

北園「お前、あの時のことを覚えているかい。いつか……日当りのよい岡の上に坐っていた……。空が青くって、白い雲がポッカリ浮いて、まるで風なんかなくて……それで、もしかしたら、タンポポが咲いていた……」

田代「そんなこともありましたわねえ……」

北園「あの時、何か大きなものが死んでいたよ……道ばたに……。あれは、何だったろう……？」

田代「牛ですよ……。あれは、大きな、灰色の、牛でした……。雲みたいな……」

北園「ああ、牛だったかねえ……。あれは……。雲みたいな……」

田代「どうでしょう、あなた」

北園「何だい？」

田代「この人達を泊めてあげたら……？」

北園「うん、私もそれを考えていたんだよ。泊めてあげよう」

田代「可哀そうですものね」

北園「そう、可哀そうな人達というのは、どんなふうであれ、ともかく可哀そうなんだからね」

田代「やさしくしてあげましょう」

北園「いたわってあげよう。悪いことじゃないからね」

田代「あなたがた、あなたがたはね、今夜ここで泊まっていいですよ。泊めてあげますわ」

北園「ゆっくりしていくんだね。ほかのことは、まあ後で話すとして……」

田代「わかって？」

熊取「ええ、でも本当におかまいなく。僕達のことでしたら放っておいて下さい」

田代「お姉さんにもお話して、安心しておあげなさい」

熊取「でも、お姉様はもう、知っておいでです」

北園「知ってる？」

熊取「さっき、そう云っておりました。お母様が泊まってらっしゃいとおっしゃったからって……」

田代「お母様？」

熊取「ええ」

田代「私のこと？」

熊取「そうです」

田代「そう、それならいいわ」

熊取「もうひとつ、頂いてもいいでしょうか」

田代「どうぞ」

熊取、ビスケットを食べる。

古賀「はい。今日はここまでにします」

### 3

学生会館内、部室前。

古賀と北園。

古賀「演劇のフレームをどう考えるかって言っても、劇場空間のフレームと観客のフレームとがあるわけでしょう。観客の肉眼にもフレームはあるし、舞台にむかって対面したら、もう後ろは見えないわけですよ。対面ということになるともう一方向にしか、舞台からの情報は流れないですし、言葉の意味は抑圧的に伝達されるしかない。だから観客はそれを受け入れざるをえない」

北園「それはわかるけど」

古賀「それでいいってことですよ。劇場の粋なんて、すでに関係ないんです。ひとまずは、戯曲に忠実に演技してもらって、舞台上には表象の、言葉の意味の空間を構築して、それから身体が観客の前に曝される、そうすることで舞台に出来事の水準の意味をもたらすわけです。これを私は動的発生の水準と言ったんです。これがないと演劇やってる意味はないわけでしょう」

北園「なんで」

古賀「だって日常生活のことをここで再現しても、創造行為とは言えません。私たちはよくわからないことでもいいから、これまで観たことないものをここに生み出そうとしているんですよ」

北園「それって、間、をあければいいってことじゃないよね」

古賀「ええ」

古賀「でも、もっと間をあけないと、観客が心地いいリズムで舞台に同化してしまうじゃないですか」

北園「うん」

古賀「わかりやすくしたらだめなんです」

北園「どうして」

古賀「観客がテキストの意味だけで演劇を理解したら終わりでしょう」

北園「私、そんなこと言ってないんだけど」

北園「だから、なんで、あそこで、昔のこと思い出さないといけないのかな」

古賀「わかりません。作者に聞いてください」

北園「演出ならそこを理解して、俳優に伝えるべきよ」

古賀「そうとも言えませんよ。上演は戯曲の奴隷じゃありません」

北園「もう、いいわ。理屈ばかり」

古賀「雲みたいな牛のことがわかったところで演技がうまくいくんですか」

北園「うまくいくいかないの問題じゃないでしょう」

戸田、来る。

古賀「戸田さん、バイト、いいんですか」

戸田「うん。いい。まだ、もうちょっと、大丈夫」

戸田「まだ。電車あるよね」

北園「菜々子はなんにも気にしてないって、言うんだけど」

戸田「それ、ポーズじゃないの」

北園「え、なにが。誰が」

戸田「そんな、役のことなんかいちいち考えるの、へんじゃない。ちょっとぐらい違和感あつたって、すんなりせりふ言える役者のほうがいいってことになってるって思う」

北園「なってるって、なに、なってることそのままにしていいの」

戸田「現状の報告してるだけなんだけど」

北園「報告者が、問題から逃れられているとは思わないでよ。ポーズとってるのは私？それとも菜々子？」

戸田「そこ、そんなに大事なの」

北園「かおる自身はどうなの」

戸田「私、そんなこと聞かれるために、ここにいるんじゃないんだけど」

北園「え、なに」

古賀「遠回しに演劇部批判ですか」

戸田「そうとるんなら、とってもらってもいいけど」

古賀「なってるって、そういうことでしょ」

古賀「バイト、何時までなんですか」

戸田「11時」

古賀「電話します」

戸田「え、いいって、そんなの」

古賀「じゃ、会いに行きます」

戸田「なんで」

古賀「ひまなんで」

戸田「こっちはひまじゃないよ」

古賀「声、ききたいから」

戸田「じゃ、電話でいいじゃない」

古賀「電話します」

戸田「いいって」

戸田「北園さん」

北園「はい」

戸田「今日、レポート、いるんでしょ」

北園「え、あ、明日でいい。授業終わってからでも」

戸田「夜、持って行こうって思ってたのに」

北園「いいよいいよ、そんなの、家もどってからなんて」

北園「どうしたの」

戸田「うん？どうもしない」

田代と熊取、来る。

田代「覚えてるって言っても、雰囲気っていうか」

熊取「覚えてないな。中学のときでしょう」

田代「もう一人のほうは、二年の3学期だけいたんだって」

熊取「微妙。それいないも一緒でしょ。二年の3学期だけって」

田代「えっと、名前、なんだっけ、忘れちゃった」

熊取「梅津」

田代「それは、さっき会ったほう」

熊取「梅津か。まったく覚えてない」

田代「顔見たら、思い出すって」

熊取「雰囲気って。顔からの雰囲気ってこと？」

田代「人の顔って、実際見ないと思い出せないよね。佳子の顔、今日家に帰ったらすっかり忘れてるもん私」

熊取「え、そう。そうかな」

田代「絵に描けって言われたら、描けないよ。だから、雰囲気だね、覚えてるんだと思う、その人のことって」

熊取「その人って誰、梅津くん？」

田代「いや、一般的に。人一般として。全体的雰囲気」

北園「どうしたの？」

田代「なんか、中学の同級生に会って、明日、ご飯食べようってことになった」

北園「へー」



田代「友人を誘ってくださいってことなんで、来る？」  
北園「いいよ、そんな」  
田代「来てよ」  
北園「うーん」  
田代「佳子は」  
熊取「行くけど」  
田代「行くんだ」  
熊取「え、菜々子、行くんでしょ」  
田代「どうしょ。断ろうかなって、思ったりもしたけど」  
熊取「なに、それ」

戸田「古賀さん。明日、何時から」  
古賀「5時から、講堂です」  
戸田「5時半になると思う」  
古賀「はい」

戸田「じゃ」

戸田、みなにさよならの合図をして、去る。みな、その合図に、それぞれに返す。

#### 4

繁華街にあるクラブ。大音響の音楽。

それに身をまかせる若い男女たち。その中に、田代、熊取、梅津、加納。やや、離れて戸田と北園。

梅津「ここ、よく、来るの」  
田代「ええ？」  
梅津「ここ、よく、来るの？」  
田代「なに、聞こえない」  
梅津「ここ、よく、来るの？」  
田代「はじめて」

熊取「かおる、大丈夫かな」

田代「飲み過ぎでしょ」

熊取「北園さん、嫌がってんのに」

田代「あんたのせいでしょ」

熊取「え、なに、なんで」

田代「げに恐ろしき怪物、嫉妬」

熊取「は？」

梅津「嫉妬なんて複雑な感情、ロボットには無理ですよ」

熊取「バス、最終、行きましたー」

加納「歩いて帰るなんて信じられない」

梅津「それか、朝まで」

加納「タクシーでいいじゃない」

梅津「いやいや。大丈夫、歩くよ」

加納「なんなら、おれの部屋、いいよ」

梅津「ええ？」

加納「いや、ホテルの部屋、おれの。泊まったら」

梅津「いいよ」

加納「なんか、飲む」

梅津「ビール、かな」

加納「よし、おれが買ってきてやるから」

梅津「悪いな」

熊取「あんなのいたかな」

田代「聞こえるって」

梅津「あいつ、今度、県会議員の選挙に出るんで、よろしく」

加納、バーカウンターへ。

戸田と北園。

戸田「言ったっけ、三田先生、リョウちゃんに冬休み諏訪神社に行こうって言ってきたって」

北園「げ。で、行ったの、リョウちゃん」

戸田「おおみそか、初詣には中途半端な時間だったらしい。混むまえに、どう？って」

北園「なんじゃそりゃ」

戸田「クジャクの求愛行為についての蘊蓄たれたらしい」

北園「え、神社で。あ、そっか、あそこ、クジャクいるしな。」

戸田「オスがさ、こりゃいいメスだなんてメロメロになったら、はからずもばさって、見事な翼広げてしまうらしいって」

北園「そうか、ばさーって、極彩色の」

戸田「そうそう」

北園「派手なだけに、かなしいな」

戸田「それひろげられたほうも、どうかとも思うよ」

北園「うーん、そっか。圧倒的にすごい色だもんね、あれ」

加納「ちょっと、話し聞いて欲しいんだけど。いいかな。さっきの店じゃ、なんか、そんな感じじゃなかったから。いや、どうなんだろうって思ってた」

北園「え、なにが」

加納「内閣府の調査だと、今は都会に住むより地方で暮らすほうがいいって思う人がかなりの数になるらしい。なぜなら、今や、東京の生活環境は最悪だからね。ものや情報にあふれていてもお金と住む場所がなければ生きていけないからさ」

加納「たとえば、20代、30代女性の就労人口がかなり減少している。子供ができて働け続けるのが難しいので、一人目の出産で、仕事やめて専業主婦でしょ。そうすると収入も減る。保育所なんてないから、二人目なんてありえない。子供どころか、旦那一人の稼ぎでやっていけないと結婚自体無理っていう二極化なんだよ、東京は」

加納「わかるかい」

北園「わかりません」

加納「島根県ってあるでしょ。日本で一番若い女性が働いてるのが島根県でさ、出産率も日本で二番目に高い。島根だったら、二人合わせて年収500万でもかなりいい住環境で暮らせていけるようになってる」

北園「じゃ長崎は？」

加納「今度調べとくよ」

戸田「あ」

戸田、持っていたグラスを落とす。床で割れる。

戸田が呆然としているので、北園が破片を拾おうとする。すると、突然、戸田が北園の背中を押す。

北園、床に手を着く。ガラスが手に刺さる。

北園、立ち上がる。手のひらに血が湧き出る。

店員が来て、片付ける。

加納「いまや、地方のほう暮らしやすいつてというのがリアリティなのね。外から企業誘致して景気悪くなったら首切られるつていう旧来型の就労モデルじゃなくて、地方の資源生かした、なんていうか、こう、ご近所の地道な関係性から生まれて来る、身の丈にあった文化活動とかビジネスに転換する時期なんじゃないかな」

戸田「手、切ったの？」

北園「うん」

北園、戸田を見て、それからやや離れた熊取を一瞥。洗面所へ走る。

加納、梅津のところへ行き、ビールを渡す。

加納「あ、いいよいいよ」

梅津「え」

加納「お金はいいよ」

梅津「ああ。そう」

加納「泡、ないな」

4

スタジオ。リハーサル。

戸田以外の演劇部員。

熊取「来ないって、ずっとってこと」

田代「そんな感じだったけど」

北園「辞めるってことでしょ」

熊取「そんな、急に」

北園「それか、一周間くらいしたら、顔出すんじゃない？」

北園「ま、どっちかよ」

熊取「そのあいだ主役なしでどうするのよ。」

田代「もう、来ないと思うな」

田代「ヘッドフォンのコードあるでしょ。部屋行ったら、それがあって。……切れてて。ベランダの物干引っ掛けのところにコード引っ掛けて。首吊る前に、強度確かめようと手でひっぱるようにぶらさがって見たらブチって切れたんだって」

田代「ここ、笑うところだってよ」

古賀「今日は、私が戸田さんの代役をやります」

古賀、熊取の腕をねじあげる。熊取、ゆっくり立ち上がり、それからゆっくり床にうづくまる。

古賀「私が何をしました。私がどんな卑しいことをしたと云うんです。そしてそうなら、それは誰のためです。一体誰のためにあんなことをさせられたのです。云いなさい。云ってごらん  
なさい。私のしたことに比べたら、あなたのしたことはなんです。どっちが卑しいんです。一体どっちが卑しいことなんです。云いなさい。さあ、ハッキリ云ってみなさい」

北園「お前さん、あやまりなさい。ね、あやまりなさい。お姉さんのいいつけにそむいてはいけ  
ないよ。お姉さんはね、これまでどんなにか苦勞をしてお前さんを育ててきたのさ。ね、わ  
かるだろう。お前さんが可愛いのだよ。お姉さんのいいつけにそむいてはいけない。いけない  
よ」

古賀「お父様。お父様はしばらく黙っていて下さい。弟には分かっていないのです。私が何を  
したか、私が誰のために何をしたか。そのために私がこれまでどんなにみじめな思いをしてき  
たか……。いいですか、お前、私はお前にいつも何と云ってきました。おなか为空いている時  
は卑しいことをしてもいいと云いましたか？お父様お母様の前で無作法にふるまってもいいと  
教えましたか？あやまりなさい。お父様お母様に、ごめんなさと云いなさい。さあ、お詫びを  
するのです。お前のしたことで、私がどんなに恥ずかしい思いをしたか、分かりますか？分か  
ったら、あやまりなさい。お詫びをなさい。あやまるのです。あやまるのです。あやまるので  
す……。 (いいながら、熊取の頭を床にゴツンゴツンと打ちつける)」

田代「やめてちょうだい。いいんです。本当にいいんです。可哀そうじゃありませんか」

古賀「放っとして下さい。(ますます乱暴に) お前の食べたビスケットは誰の分だったのです。  
お前のために今夜誰が飢えなくてはいけないのです」

田代「あるんですよ。いっぱいあるんです。きっと食べきれないくらい……」

古賀「誰の分だったんです。誰が飢えなくてはいけないんです。云いなさい」

北園「やめなさい。今すぐ持ってきてあげます。あんなもの、いっぱいあるんです。(とめよう  
として古賀の手をつかむ)」

北園、怪我した手が痛いので、手をはなす。

古賀「……はなしてください」

戸田が立っている。

北園「やめるんだ。一体何のためだ。何をするんだ」

古賀「お願いします。あやまらせます。すぐあやまらせます。許してやって下さい。悪気はなか  
ったんです。弟は、すぐあやまります。いつもはもっと素直で聞きわけの良い子なんです」

戸田が立っているのに、みな気づき、戸田を気にしながら。

北園「いいんだよ、私共はちっともかまわないんだから……」

古賀「あやまらせます。私の気がすみません。どうか、許してやって下さい。この子だって、  
もう心の中では後悔しているのです。あやまっているのです。泣いています。口に出せないだ  
けなのです」

田代「あなた」

古賀「許して下さい、お母様。私がいけなかったのです。私が悪いのです。私が、あんな卑しいことをした女だから……」

田代「違うのよ、もういいの」

古賀「いいえ、そうなんです。弟を悪く云わないで下さい。後悔はしているのです。私からもお願いします。弟は根はやさしい礼儀正しい人間なのです。普段はとても我慢強いのです。おなかがすいていたのです。ただそれだけです。それを責めるわけにはいきません。それを責めないで下さい。あやまらせます。私からもお詫びします」

戸田、去る。

古賀「いま、戸田さん、来ましたよ。でも、また、行っちゃいました」

5

同、スタジオ。夜。

北園と熊取。

北園「稽古したいから、相手してくれる」

熊取「いいよ」

北園「じゃ、ここから読んで」

熊取「お母様、足はもうすっかりいいんですか」

北園「お母様……あ、家内のことですか？まだ良くはないんですがね、冷え込むとやっぱりね。でも、よく知ってますね、家内の足の悪いころなど」

熊取「私、あの話しは忘れてもいいんです」

北園「そうなさい。忘れることですよ。二十年も前のことですからね」

熊取「でも私、ひとつだけ知りたいのです」

北園「何を……？」

熊取「私、きっと、誰かに教えられたんだと思います」

北園「何をです？」

熊取「あのことを……」

北園「ああ、そうでしょう。そうですとも」

熊取「あなたですか？」

北園「え？」

熊取「私に教えて下さったのは？」

北園「私が？」

熊取「ええ」

北園「私が？」

熊取「ええ」

北園「私が……？」

熊取「ええ」

北園「……何故だろう？」

熊取「覚えておりませんか？」

北園「え？」

熊取「私に覚えがありません？」

北園「あなたに？」

熊取「私、あなたの娘です」

北園「あなたが……？」

熊取「ええ」

北園「まさか」

熊取「どうしたの？」

北園「首。に」

熊取「え」

北園「首に、さわっていい？」

熊取「え、なんで」

北園「ね、さわらせて」

北園、熊取の背後に立つ。

熊取「え」

熊取「……なに。どうしたの」

北園「包帯取ってから」



熊取「ちょっと」

北園「じっとしてて」

熊取「……かおる、北園さんに謝りたかったんじゃない？」

熊取「……それか、あれ幽霊だったかも。存在感のなさ半端なかった」

北園、熊取の首を触る。

熊取「わ」

北園、首に噛み付く。熊取、あわてて逃げる。

熊取「え、いま、なにした？」

熊取、気を失う。

北園、熊取の身体をゆするが、起きない。

北園、熊取のシャツを胸まで上げる。露になった肌に手をのせる。

古賀が来る。二人に驚く。

古賀「田代さんが台本忘れて。家に原本あるそうなんです、メモとかあるからって」

古賀「まだ大学にいるんだったら取って来てって言われたんです」

北園、ナイフを持つ仕草。

古賀「なにしてるんですか」

北園「解剖」

北園、ナイフで、熊取の腹部をまっすぐに切る。

やがて、熊取、ゆっくりと目を覚ます。

熊取「……私、気失ったでしょ」

北園「うん。すごかった。びっくりした」

熊取「血に関するイメージ、だめなんだな。昔、献血でこうなって以来」

北園「だいじょうぶ？」

熊取「もう、大丈夫。あ、古賀さん」

古賀「はい」

熊取「あ、そうそう。あの役さ、かおるより、古賀さんのほうがいいよ」

熊取「かおるは、……なんて言うか、ちょっと違うと思う。さっきのリハーサル、ものすごくしっくりきた。だから、かおる、来なくなって良かった。ね、本番もさ、古賀さんでいこう」

古賀「私は戸田さんがいいと思います」

熊取「なんで？」

古賀「……もうしばらく、様子見て、決めましょう」

古賀、去る。

熊取も、いそいで荷物を取り、

熊取「ごめん、電車の時間あるから、私も帰る」

熊取、去る。

北園「……私は見たんですよ、私の娘が、私の目の前でひかれて死ぬのを……。ウソじゃありません。娘は死んだんです。……私は知らなかったのです。こいつがしきりに起こすのです。夜中ですよ、雨が降っていました。あの子がねまきのまま、電車通りを、誰も居ない電車通りを、走ってゆくのです。私は追いかけてました。呼びましたよ、何度も何度も……。角を曲がろうとしてちょうど、市電が入ってきたのです」

梅津と加納が来る。熊取、知らないふりをする。

梅津「あ、どうも。こないだは、どうも」

熊取、会釈。

梅津と加納、熊取に近づく。

電車が来る。三人、乗る。

電車、混んでいる。

吊り革につかまる三人。真ん中に熊取。

梅津「加納、明日、東京に帰るって」

梅津「でも、また、すぐ戻って来て、長崎に住むって。なあ」

加納「ああ。うん」

梅津「言ったっけ。加納、こっちで選挙に出るって。それまで、東京とこっちを、行ったり来たりするんだよ」

梅津「加納栄太郎をよろしくお願いします」

加納「ははは。やめろよ」

梅津「長崎駅まで？」

梅津「そっからバスに乗って、野母崎のほうだっけ、家」

梅津「こいつにさ、どっか、安くていいところ紹介してくれないかな。アパートでいいんだけど。

学生が住みたいなとこでいいから、ないかな。こっち、来たとき、ホテルじゃさ、政治活動も制限されるじゃない。最初のうちは事務所としても使えるような場所、探してるんだけど」

熊取「なんで、この人ばかりしゃべってるの。どうして、この人黙ってるの、気持ち悪い」

加納「あんたさ……名前、なんだっけ。結局さ、田代さんしか、名前と顔、一致しなかったよ。

おれとクラス、違ったのかな、やっぱり。ね、教えてよ、名前」

熊取、スマートフォンをいじる。

梅津「……おまえ、加納に失礼だろ」

梅津「じゃ、駅前で、ちょっと飲まない。加納、今夜、長崎、最後だからさ。ひとまずは、だ  
けど。それで、これからのこいつの活動を手伝ってもらえたりしないかな」

熊取、電車を降りる。梅津と加納も追う。長崎駅のほうへ行く、三人。歩道橋の上の広場に出  
る。

次第に走り出す、熊取。それを追う、梅津と加納。

加納が熊取の肩に手をかけ、引き戻す。

加納「いいか。おれは驚いてるんだ。そのことを説明しなきゃいけない。こっちにベンチがあ  
る。これにすわってくれ」

熊取「いい、そんなのいいから。やめて！」

加納「ベンチにすわってくれ」

加納、無理矢理、熊取をベンチにすわらせる。

加納「……梅津、梅津」

梅津「なんだよ」

加納「なんか、言ってくれ」

梅津「なにを。おまえ、ここは正念場だろ」

加納「……おれはなにを説明したらいい。なんなら、ここで演説してもいいんだけど、説明は  
苦手なんだ。っていうか、この気分を説明するのは無理なんだ。一体なにを言えばいい。……  
そうだ、そうそう、やっぱり長くなるから、ベンチで聞いてくれ」

熊取は怯えている。

加納「いいか、おれたちには昔、好きな女がいた。そいつのことが好きだった。けども、そ  
れは、好きだって二人で言い合ってこそ好きだったんだ。おれはそんなに彼女のことが好き  
じゃなかったけど、言っているうちに、好きになっていった。梅津と好きな女のことを話すこ  
とで、もっともつとその女ことが好きになる。恋ばな言葉が育む愛、そんな感じだった。それ

だから、当然、転校したら、彼女のことは忘れたし、その名前も忘れた。でも、今年の正月に久々に梅津に会ったとき、梅津がその彼女のへの想いを持ち続けていることを知った。おれもそれに感染してしまったんだ。忘れていた愛が再び、おれの魂に火をつけた。でも、梅津も、その女の名前は忘れたって言うんだ。顔も思い出せないんだよな」

梅津「うん。ただ、なんていうか、ある感触だけは、わかるよ」

加納「そうなんだ。そうなんだよ。切ないじゃないか。……しょうがない、覚えているのは誰だってことになって、思い出したのが田代だった。田代だけが希望だったよ。田代に会ったら、もしかすると、彼女にも会えるかもしれない。芋づる式に、その実体のない感触ってやつに輪郭がともなって来るかもしれない。だから、おれたちは無謀な懸けに出たんだ」

熊取、逃げる。

加納「馬鹿、おまえじゃない。おまえじゃないよ。勘違いするなよ。おまえなんかじゃないんだ」

加納、熊取に抱きつく。

熊取の絶叫。

一人の長崎市民が立ち止まる。

梅津、加納を熊取から引きはがす。

二人、逃げるように去る。

やがて、熊取、ゆっくり立ち上がる。

市民が声をかける。熊取、大丈夫です、という仕草で応じる。

市民、去る。

熊取、ふるえる手でスマホに触る。誰かへメール。

電灯の下。

やがて、電話が来る。

熊取「もしもし……」

熊取、携帯にすがりつき、ふらふらと暗いほうへ消える。

